

見方を変えれば  
人生は変わる

他のことに心を奪われていて眼前のことに心が集中できないことを、「心ここにあらず」という。

その出自は、『天学』\*1の「心焉こころに

転期に立つ経営の視座④  
爾に出ずるものは  
爾に反る

在らざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず、食らえども其の味を知らず」にある。

「心がここにはない上の空の状態では、見ても正しく物を見ることはできず、聞いても正しく音を聞くことはできず、食べても本当の味を知ることはできない」が、その意

である。

先のリーダー塾では、「今座っているいすの上に乗ってください」と、立つように促した。突然の一声に、「これから何が始まるのだろう?」と、戸惑いを隠せなかった人もいた。いすの上に入ったことで

## はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。「継承と人財創造塾」主宰。『介護ビジョン』編集委員。介護福祉教育エキスパート。著書に『99の言葉の杖』(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ! 経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

HP: <http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

「視点が変われば判断が変わる」「見方を変えれば人生は変わる」という言葉がある。

こうした時代背景を目の当たりにしながら、年頭の抱負や目標を語ろうとするとき、視点を移動させて立ち位置を変えるきっかけとして物は試し\*2、自らいすの上に乗って周囲を眺めてほしい。介護経営のとらえ方、あり方を変えるための誘因となるに違いない。

心の訓おしえ

考え方や行動が浮わつて、しつかりしていないことを「足が地に着かない」という。いすに座るとそうした状態になることがある。その一方で、いすの上で立つには足を着けて踏ん張らなければならぬ。「足を着ける」とは、手がかりやきつかけをつくることである。

いすを前にして、「足が竦む(恐怖や緊張から足が強張って自由に動かなくなる状態)」という人もいる。地面や床の上で立つ感覚とは異なるからだ。「足を引く張る」「足を掬われる」「足下につけ込む」など、複雑な人間模様を見すこしてはいないだろうか。

一年の始まりを機に「いす(に当たるもの)とは何か!」を考えながら、「足を使う」ことや「足がかり」など足にまつわることわざの意味を紐解きながら行うのがよい。

物事への対し方が、積極的、発展的であることを「前向き」というものの、利用者を誘導するため「後ろ向き」に歩くことが求められている介護現場の日常がある。

柔軟にあらゆる角度から見極めることができる人間力の醸成を図るためにも、先入観や思い違いはなかったかと問いかけたい。

ある塾生の事業所に掲げられた一節が目にとまったので記す。

## 心の訓

辛いことが多いのは、感謝の心が足りないから。  
苦しいことが多いのは、甘えの心があるから。  
悲しいことが多いのは、自分中心の心が多いから。

心配することが多いのは、今を懸命に生きようとする心が足りないから。  
行き詰まることが多いのは、自分の心が裸になれないから。  
すべて自分の心が決めている。

「爾なんじに出ずるものは爾かえに反る\*3。」

\*1: 『中庸』『論語』『孟子』とともに儒教の教書と言われる中国古典・四書の一つ \*2: 2015年11月号本稿参照 \*3: 中国古典『曾子』から